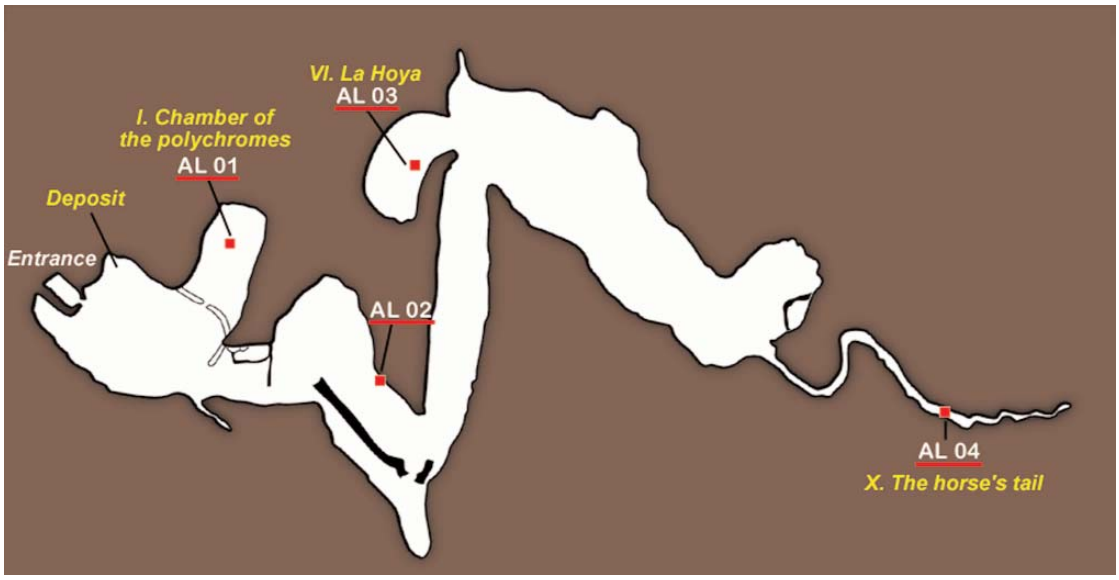
3.2

アルタミラ洞窟（Cueva de Altamira.）



カンタブリア地方の洞窟のうち、世界的に最も名の知られたこのアルタミラ洞窟は、サンティジャーナ・デル・マルの町から南西約2.5kmのところにある。開口部はなだらかな石灰岩の丘の頂上付近にあって、標高約161m。周囲を制するに十分な場所である。「アルタミラ」、つまり「高い望楼」という洞窟の名が示すように、ここからは約5km先の海岸線に連なる西ならびに北のカルスト台地全域に視界が開けており、また約2km南にあるサハ川の方向も見渡すことができる。

アルタミラ洞窟には、まさに信じられないほどの美しい壁画が残されている。しかし、考古学遺跡としてのアルタミラ洞窟は、必ずしも孤立したものではない。実際、そこから半径10kmの範囲には、アルタミラほど目は引かないものの、幾つかの旧石器時代の壁画洞窟が見つかっている。つまり、西の方角にはラス・アグアス洞窟とリナール洞窟、南のサハ川岸にはラ・クロティルデ洞窟、東にはサハ川を越え、ベサヤ川と合流した地点にクドン洞窟、またベサヤ川の下流にあるソビージャ洞窟などがそれぞれ開口している。この地域には、後期旧石器時代のヒトの居住跡など考古学包含層だけであればもっと他にも洞窟はあり、ラ・ペーニャ・カランセハや、クアルベンティ、グルグー、ラ・ピーラなどの洞窟がその代表である。

北スペインではこれまでに約100の壁画包含洞窟が見つかっている。それでもアルタミラ洞窟で見られるあのバイソンの多彩色画は、その発見から120年たった今でもその美しさにおいては群を抜いており、これは疑いなく、西洋の先史時代を通して最も驚嘆すべき壁画のひとつであろう。

しかしながら、考古学的には、アルタミラ洞窟はごく普通の洞窟であり、この地方の他の壁画洞窟や考古学遺跡とそれほど変わっているわけではない。洞窟内部の壁と天井には、あの有名な多彩色の動物たちの他に、線刻画や黒の彩色画、また赤や黄色、スミレ色の動物やヒト形、抽象的図形、その他、非具象的なモチーフなどが描かれている。同じく洞窟入口付近の外光が届く辺りでは、ソリュートレ文化期とマドレーヌ文化前期のヒトの居住跡が調査されている。ここでは、およそ18,500～14,000年前に繰り返し住居として利用された痕跡が認められている。洞窟内部の壁画は、この期間にその大半あるいは全てが描かれた。大半あるいは全てというのは、これから見ていくように、壁画の年代の年代については、研究者によってかなり意見が分かれているからである。

この洞窟は、1868年からサンティジャーナやビスピエレスの住民には知られていたようであるが、ほとんど

利用はされていなかった。この洞窟を初めて科学的に調査したのは、自然学者で考古学者のマルセリーノ・サンス・デ・サウトゥオーラである。彼は、1875年から1879年にかけてこの洞窟を調査し、洞窟の開口部付近で旧石器時代の考古学包含層を発見した。そして、そこからは、石や骨、角でできた沢山の道具類や炭、またそこで消費された動物の骨や貝殻などフランスの洞窟で見つかったものとよく似たものが出土したのである。同時に洞窟内の壁に黒い絵を発見しているが、その当時はあまり重要視していなかった。こうして1879年のある日、調査についてきた娘のマリアが、洞窟のある広間の地面からかなり低い位置にあった天井に、赤と黒で描かれた大きなバイソンを見つけたのである。

このバイソンの発見を機にさまざまなことが起きることとなる。サウトゥオーラは、早急に壁画に関する調査を行い、自ら行った正確な分析結果を発表することにした。つまり1880年、記念すべき小冊子によって「彩色画と考古遺物からみた旧石器時代」という概念を世に提唱した。当然ながらサウトゥオーラの提唱は、未開社会や進化に関する当時の概念と真っ向からぶつかることになり、苦い論争を呼び起こすこととなった。そして、その後、やがてフランスのドルドーニュ地方やフランス領ピレネー地方で確実な証拠が集められ、アルタミラの壁画が旧石器時代のものだということがようやく受け入れられただけでなく、この論争の最も重要なテーマであった技術的にも経済的にも「未開人」である人々(これは先史時代の人のみならず、現在の先住民に関しても)が、十分に美的能力と知的能力を持ち得るということが認められたのは、20世紀に入ってからであった。

今世紀初頭の頃である。E.カルテラックと当時はまだ駆け出しであったH.ブルイユの2人がサンティジャーナを訪れ、アルタミラ洞窟の壁画全体を初めて調査した。壁画の調査と分析は、これらの壁画が旧石器時代のものであることを証明すること、そして現在の先住民の芸術との比較を行うことに焦点が向けられていた。その結果は1906年に出版されたが、その中には当時、H.ブルイユに協力をしていた現地の重要な研究者の一人、アルカルデ・デル・リオが行った発掘調査の結果も盛り込まれていた。

とはいえ、アルタミラ洞窟に関する最も基礎的な研究については、それから30年経った1935年、H.ブルイユとH.オーベルマイヤーが1冊の本を出版している。その中には、1906年の調査と比べると、かなり新しい試みが導入されている。絵の写しや照明方法における新たな試みなどがそれで、「多彩色画の広間」の床面がかなり掘り下げられ、スケッチや採寸がかなり楽にできるようになっている。このような便宜に加え、以前よりも潤沢な資金が調達できたことでより詳細な調査が可能となり、いくつかのパネルの重ね描きの順序や絵の模写などの他、1906年の調査における間違いも訂正することができた。またアルカルデ・デル・リオがかつて行った発掘調査に加え、1924年と1925年にオーベルマイヤーが行った新たな玄関口の発掘調査の結果も掲載されている。

アルタミラ洞窟の壁画の年代や特徴、描かれた順序に関しては、A.ルロア・グーランが大著書を発表したのを機に大きく修正されることとなった。実際、ルロア・グーランは、アルタミラの記録をきちんと見ていなかったにもかかわらず、またこの洞窟に関しての彼の研究には、大きな手抜きや重大な見過ごしがあったにもかかわらず、動物の多彩色画の描かれた年代は、それまでの推定より数千年前であるとの変更を提唱したのである。つまり、ルロア・グーランによれば、技法的にも表現的にも後期旧石器時代の最高峰であるアルタミラの大天井のバイソンは、ブルイユが推定するような後期旧石器時代末期のものである必要性はまったくなかったのである。そして、彼は、壁画とモービルアートとの関連からこれらの壁画が描かれたのは、もっと早いマドレーヌ文化前期から中期(様式IIIからIV)と推定したのである。現代の放射性炭素法により、この変更は基本的には正しいものと認められている。

現地調査の結果については、ルロア・グーラン以来、今世紀初頭の30年余りの間に膨大な数が発表され、その都度、新しい印象が付け加えられ、新たな解釈、更新がなされてきた。本稿もそれらの文献の1つであるといえる。しかしながら、最も初期に行われた研究と比肩できる程の意義を持つものは他にはない。中でも目を引くものは、L.G.フリーマンと何人かの研究者が行った洞窟の最奥部にある狭い回廊「馬の尾」の研究や、玄関口での新たな発掘調査、壁画や出土品の放射性炭素による新たな年代測定などで、広報活動としては、P.サウラが最近出版した著書には素晴らしい写真が掲載されている。しかしながら、これほど多くの出版物があるにもかかわらず、アルタミラ洞窟は、現在でもよく知られているとはいえない。H.ブルイユが行った現地調査は、当時としては素晴らしいものであったが、現在では既に不十分なものになっている。実際、記録について言えば、洞窟内には発表されているものよりずっと多くの絵が描かれており、また、文献に述べられている動物でもかなりの数が絵として記録されておらず、大天井の記録にしても、はっきりと見える目立った絵だけが記載されているだけで、写し描きも部分的でそれぞれの絵の特徴部分だけしか記録されていないのである。

アルタミラ洞窟の入口は北北東を向いており、海抜僅か160mほどのところにある。入口を入ると約300mの洞窟となるが、地形的にそれほど複雑なものではない。この洞窟が厚さ1mほどの一定した石灰岩盤と薄い粘土層とが交互になってできていることは注目すべきことである。縦方向の岩の裂け目や岩塊の崩落などはこの洞窟ではしばしば見られる。こうして洞窟の構造が恒常的に不安定であるため、洞窟はかなり曲りくねり、起伏が多く、広間や回廊の天井は平らで側面は垂直となり、断面で見ると四角形になっている。時にはぶら下がるようにキャンバスが形成され、その縦の面、あるいは地面に平行な面を、当時の人々は絵を描くのに利用したのである。一方、洞窟が方形であるということは、壁画の保存に関して重大な影響をあたえることとなった。また洞窟は、壁画発見後は行われていないものの、それまでに行われていた近くの石切場での発破や、多彩色画の広間における床面の掘り下げ工事によってもかなりの影響を受けていた。そのために1920年代なると、洞窟全体のさまざまな場所に、天井を支える丈夫な支柱や壁を作る必要性が出てきたのである。最も大きな支えは玄関口と彩色画の広間の間にこしらえたもので、元々は繋がっていた空間を人工的に分離した恰好となっている。この様な工事の影響としては、この壁画の広間を縮小してしまい、その天井や崩落した岩塊にもともとあったかもしれない壁画を隠ぺいしてしまった可能性、あるいは部屋の換気条件を変えてしまったことなどがあげられる。

元来の入口に近い玄関口には、この洞窟の歴史のさまざまな段階に起きた崩落の跡が確認されている。最も重要な崩落は地層的に見て旧石器時代、ヒトが住居として利用していた時代に起きている。崩落の跡はソリュートレ文化期の地層の下にあるものと、ソリュートレ文化期からマドレーヌ文化期の地層を部分的に覆っているものがある。この最後の崩落はマドレーヌ中期または発展期に起き、以来、玄関口は手狭となり、換気の点からも住居としては不適切な場所となった。そして、入口付近は時とともに崩落した岩で固く閉ざされ、アルタミラ洞窟はしばし忘れられた存在になった。

そのためにアルタミラ洞窟の広々とした玄関口には、後期旧石器時代発展期のヒトの居住跡が数多く残っている。何度も行われた発掘で、今から約19,000～16,500年前のソリュートレ文化発展期から、約16,000～14,000年前までのマドレーヌ文化初期まで相次いでヒトによる利用があったことが分かっている。しかし、この発掘も簡単に行えたわけではない。床面にはさ多くの崩落した岩塊が転がっており、まずはそれら取り除く必要があったため、考古学包含層を思うように掘り下げることは容易でなかったのである。もっと手早く清掃して先に進む方法もあったはずであるが、それも洞窟の構造が不安定なため、新たな崩落の危険性もあって不可能であった。というわけで、ソリュートレ文化期以前にここにヒトの居住があったかどうかは未だ本当には分かっていないのである。このことがこれから見ていくように洞窟の壁や天井に描かれた壁画について、さまざまな年代解釈がなされるゆえんともなっている。

アルタミラ洞窟の考古学包含層は、基本的に2つの層に分けることができる。古い方は、ソリュートレ文化期のもので、その地層からは多くのフリントや珪岩の石器が発見されている。特になだらかな角度の刃を持ち、基部が凹状の刻み目のある狩猟用の尖頭器が特徴的である。また、中央部が平らであったり、片側の角落しがあったり、両端が尖頭になっていたりするシカの骨で作られた投げ槍用尖頭器など骨で作られた道具類も見つかっている。中でも骨の片に穴をあけ、傍に線刻の印をつけて装飾してある4つのペンダントヘッドが際立っている。この地層から出土した骨からは、18,540±320年前という年代が特定されており、ソリュートレ文化期という年代的な特徴と非常によく合致し、納得のいくものである。

マドレーヌ文化初期と思われる地層からは、さらに豊富な通常の骨の道具類が見つかっている。その中には、四角い断面を持ち、基部の片側のみが角落しされた投げ槍や、めどのついた針、へら、ウマや原牛の歯でできたペンダント、そして大量の石で出来たエンド・スクレイパーやビュラン、長辺の一つに刃潰しの加工がしてある剥片などがある。この層は、何度か放射性炭素法による年代測定がされており、15,910±230年前から13,900±700年前の間という値が出ている。線刻された雄ジカの肩甲骨については、質量分光加速器を使って年代測定が行われ、14,480±250年前という値が得られている。こうした肩甲骨には条線状の溝の線刻で雌ジカの頭部を刻んだものが多いが、これが洞窟内部の天井や壁に見られる線刻画と非常によく似ている。従ってその年代は、カスティージョ洞窟やアストゥリアス州のエル・シエロ洞窟と同様に、これらのモービルアートがマドレーヌ文化初期に分類可能でることを意味することになり、アルタミラ洞窟のソリュートレ期とマドレーヌ期の地層のをめぐって起きていた年代の不確かさの問題が解決したのである。

洞窟内部では壁画の他に、あちこちの床面から興味深い遺物や道具類が見つかっている。特に注目すべきは、彩色画の広間の床面で採取されたアルプスカモシカが数頭描かれた穴のある錫の断片で、これは恐らくマドレーヌ文化初期のものと思われる。一方、メインの回廊では、いくつかの錐やこての断片、象られた鳥の骨の管が見つかっている。さらに驚くべき発見は、ホタテ貝（Pecten）の平らな貝殻3個である。これは中世の

巡礼者が水を飲むのに使った凹状の貝殻と対になった平らな方の貝殻で、その蝶番部分の傍に穴を空けたものが、洞窟の回廊を半分行ったあたりの岩塊の下に隠れていたのである。

アルタミラ洞窟の住人は、主としてシカ、時にはバイソンや原牛、ウマ、あるいはヤギやアルプスカモシカなどの岩山に生息する動物を狩猟することで生計をまかなっていた。また食料を補うものとして、鳥や魚、時にはアザラシの捕獲を行い、海の貝を含むさまざまなものを採集していた。当時は今よりかなり遠かった海岸で貝を採集し、カサ貝（Patella vulgata）やタマキビ貝 (Littorina littorea)を洞窟まで運ぶことはマドレーヌ文化初期にはより重要な仕事になっていた。

アルタミラ洞窟全体に関する最も有名な研究は、1935年に発表されたブルイユとオーベルマイヤーによる研究である。その中で、この洞窟は入口の玄関口から終点にある細い回廊までの約300mにわたり、地形的に10の区域に分けられている。壁画は、その全ての区域に見られるが、それでもどこにでも描かれているわけではなく、もうその先に進めない部屋や回廊などいわゆる突き当りのエリアにのみ描かれているのである。その中でも最も精力的に絵が描かれている場所は、玄関口の広間の突き当り左にあるいわゆる「彩色画の間」（I 区）で、その天井は平らで比較的独立した空間である。また、洞窟中ほどの左下に開いている「穴」とも呼ばれる広間（VI区)や、その他の狭いギャラリーがある。また、かがんだり這っていく必要のある洞窟突き当たりの「馬の尾」とも呼ばれる狭い通路（X区）にもかなり精力的に絵が描かれている。特に、I区やX区には、アルタミラ洞窟の壁画の95%が集中している。以下でその全体をざっと見ていくことにしよう。

広間 I：「彩色画の間」

玄関口の突き当り左側に1つの広間が開口している。そこは既に薄暗く、天井は低いが広い場所である。ここにかの有名な多彩色の動物やその他多数の壁画が描かれた天井がある。現在この広間は、1925年に作られた天井を支える幅広い壁によって玄関口から切り離された形になっている。また、床面も壁画の鑑賞をしやすくするために部分的に掘り下げられている。

この広間は長さ約18m、幅は8から9mで、天井の本来の高さは入口部分で約2m、奥の部分で約1.1mである。この広間にある彩色画と線刻画のすべてがその天井に描かれており、特に多彩色で描かれた動物の大半が2m近くもあることを考えれば、それを描くのはかなり大変であったと思われる。

さまざまな色調の赤に黒を添えて描かれ、時には線刻も使って描かれたこれらの動物の絵は、アルタミラ洞窟で最も知られた絵柄である。それは現在生息するヨーロッパバイソンよりも古いタイプのバイソンで、その数は優に20を超えている。これらのバイソンの絵は広間の左側の天井に特に多く見られる。手前右にも幾つか見られるが、他のバイソンとはやや離れており、保存状態は良くない。バイソンの側には、雌ジカやウマが同様の技法で描かれている。いわゆるイノシシといわれているものはかなり問題があり、少なくともその内のひとつで角と特徴的な顎ひげのあるものは、実際は飛び跳ねるバイソンである。動物の向きや姿は、頭をもたげて啼いているものや、休息を取りながら後ろを振り返っているもの、早足で飛び跳ねているもの、じっと立っているものなどまちまちである。

動物たちは、それぞれ大変異なった位置や格好で描かれている。あるものは立ち上がろうとしており、あるものはほえている。また休んでいるものもあり、後ろを振り返っているのもいる。小走りしたり跳ねているものもあれば、静かに立っているものもある。こうして沢山あるバイソンの絵ではあるが、少なくとも、それぞれの間にこれといった関係はなく、それぞれ別の絵のようである。しかしながら、それでも天井の壁画全体の構図については、これまでもいろいろな解釈が試みられてきた。その中にはマックス・ラファエルや特に後の構造主義者たちの解釈があり、最近の自然派による「単なるバイソンの群を示す」といった解釈もある。しかし、忘れてはならないことは、当時の人たちは今日我々が見るような状態でその天井を見ていたわけではないことである。照明も天井との距離も今とは異なっていたし、今世紀初めに出版され、その後計画的に複製されてきた明快ではっきりと分かる壁画全体のクロッキーのようなものは、当時の人々の手元にはなかったのである。大きなバイソンやウマ、雌ジカ、頭部のない動物、その他それらを補完すると思われるものの状態を頭の中で全てイメージすることは、少なくとも彼らにとっては大変困難なことであったに違いない。

アルタミラ洞窟の「彩色画の間」で使われた描画技法は、旧石器時代の壁画で通常使われたものよりはかなり複合的である。動物の輪郭は黒の線または小刀で描かれ、その後に着色されている。着けられた色は、赤っぽい黄土色、あるいは黒を混ぜあわせた黄土色で、時には黒だけの場合もある。幾度となく重ねられた刻線で輪郭をよりはっきりとさせ、境界を強調し、さらに目、正しい遠近法で描かれた細い角、鼻先、ヒヅメなどの詳細を表わすにも複線の線刻が用いられている。量感や肉体としての実在感を出すために色調を段階的に変化させている他、幾つかの部分で変化をつけるために色の洗い落としや削り取りを行っている。同じ目

的で、天井の隆起をうまく利用したり、動物の絵をこれらの出っ張りにうまくはめ込んだりしている。その結果、さまざまな赤い色調で描かれ、黒線や線刻で際立った多くの動物たちは、明るく黄色っぽい天井にくっきりと浮び上がり、この広間に足を踏み入れ、天井を照らしてそれを見た者の眼を常に驚かせるのである。

技法や様式が均一で、また大きさも比較的同じ位であることから、さまざまな研究者は、この「多彩色画の間」のバイソンにあっては、描き手が一人であったか、あるいは少なくとも指導的な立場の人物がいたと推測しているが、これはある程度理にかなったことではある。しかし、この天井に描かれたバイソンが全ての同じ時期のものではない可能性があり、幾つかの絵については他のものと分けて考えるべきである。最近行われた放射性炭素による年代測定では、真の意味での多彩色画を含む大半の動物の絵が、14,900から14,100年前のものだと特定された。これは、マドレーヌ文化初期の発展期に対応する年代である。しかし、他よりも小さく、線刻が施されて抑揚のある色調の黒い2頭の相対するバイソンは、もっと後の時代に描かれたようで、13,500から13,100年前頃のものと推定されている。

多彩色のバイソン、あるいはこの後に描かれたらしい他の単彩色のバイソンは、一見何もない空間に、中心的な構図として描かれたもののように見える。しかし、実際は、この天井にはそれ以前から夥しい数の絵が描かれており、あの多彩色のバイソンはそこで最後に描かれた「偉大な作品」にすぎないのである。事実、バイソンの下、あるいはもっとよく見える広間両側部分に彩色や線刻によるかなりの数の動物や記号の絵が残っており、その年代も明らかにまちまちである。要するに、我々は、そこで、太い輪郭線や平塗りで描かれた多くの赤い動物を見ることができる。中でも際立っているのが、頭部が小さくて腹部が膨らんでいる純粋に先マドレーヌ文化様式の描き方によるウマの集まりである。またこのウマの上には、重ね描きされた恰好で、スミレ色で描かれた幾つかの陰画の手型や、2つの赤い陽画の手型も見ることができる。赤い絵の上に黒い線で描かれた絵もあり、これはもう完全にマドレーヌ文化期の様式である。同様にさらに多く描かれたのは、ラ・パシエガ洞窟のギャラリーBにあるような40を超す赤い「楔型」図形や幾つかの「格子型」図形、収束する一連の刻線で表わされた70以上もの「彗星型」図形である。多彩色の動物の絵は、これらすべての絵の上に重ね描きされたものなのである。最後に、この大天井にやはり多く見られるのは、動物ならびに動物の特徴を混ぜ合わせたヒト形の線刻画である。これらの絵は、さまざまな彩色画の上や、あるいは下に刻まれているものである。中でも際立っているのは、顎の部分と胸に条線状の溝の帯が描かれた雌ジカである。また、ヤギの頭の反対側で吠えている雄ジカの絵も極めて素晴らしい例といえる。この雄ジカは怪我を負っている様子はないが、ペーニャ・デ・カンダモやエル・ブッシュの洞窟、あるいはラ・パシエガ洞窟の回廊Bに描かれた類似の動物を思い起こさせる。一方、この構図は、カンタブリア地方東部のグランデ・デ・オターニェス洞窟に見えるマドレーヌ文化期の小さな壁画集合体の構図とほとんど同じである。

ブルイユは、この広間のさまざまな場所で絵が重ね描きされていることに注目し、旧石器時代の壁画の年代を提唱するにあたっては、カスティージョやラ・パシエガ、ペーニャ・デ・カンダモの一部でも見られる重ね描きと並んで重要な根拠のひとつつとしたのである。後に、構造主義の学者たちは、この大広間に描かれた全て、あるいはほとんど全ての絵は、同年代のものであるという考え方をとったが、それはまったく説得力のないものであった。

II区とV区：
これらの地区は、障害物の少ない通りやすい通路で、傍にたまに狭いギャラリーがあるくらいである。第II区には、可塑性のある粘土層で覆われた壁面を利用し、手の指、あるいは先の丸いもので線刻画が描かれた。そこではウシ科の動物の頭部1つを含む、全体で長さ約5mにわたる構図が形成されている。このキャンバスはもっと先に続いており、そこには曲がりくねったり交錯したりする線で描かれた抽象図形や動物の線刻画が描かれている。また、動物の黒の彩色画も幾つかあるが、様式はさまざまである。

その先にある第III区の中心に成長してかなり浸食が進んだ滝状の鍾乳石群には、深彫りの線刻で、大きなウマらしき2つの動物が描かれている。その滝の向こうに、いくつかの動物の線刻画や黒の彩色画が互いに独立して描かれている。

第III区の突き当りの左側に狭い隙間が口を開いており、そこに、この洞窟の奥まった部分にある抽象的な赤い図形のほとんど全てが集中している。それらは、内部が3分割されている楕円状の図形4つと梯子状の絵がほぼ2.5mにわたって帯状に描かれたもの、また、かなり消失しかかっているその他の図形などである。このように抽象的な図形をかなり隠れた場所に描くのは、カスティージョやラ・パシエガ洞窟の例にもあるように、カンタブリア地方の旧石器洞窟壁画に良く見られることである。

その反対側の壁には、いくつかの庇部分があり、都合のよい縦のキャンバスとなっている。そこには、細い線で、また時には条線状の線で雄ジカや雌ジカが交錯

するように多数線刻されている。

第IV区や第V区のより開けた回廊には、黒の彩色や線刻の絵が僅かに見えるが大きな絵の集合体とはなっていない。第IV区の始まり部分にはウマやヒトなど動物の非常に簡単な線刻画が描かれた石灰岩の塊がいくつかあるが、これらの絵は床面に落下する前に描かれたものである。また、左傍の壁には、雌ジカの素晴らしい完全な線刻画があり、その輪郭は繰り返し刻線を刻んだもので、頭部と胸には条線状の溝の帯が描かれている。この雌ジカの下に描かれた黒い線は、最近になって14,650±140年前のものだと特定されている。その先には、原牛やバイソンなどの線刻画や、ネコ科の動物らしきもの、その他の動物の黒い彩色画がある。

第VI区：
滝状の鍾乳石に囲まれた大きな側室で、そこへ入るには下にもぐり込んでいくことから、一般に「穴」と呼ばれている。この部屋の突き当りの左右に非常に様式化されたヤギ2頭の絵が描かれたパネルが残っている。これはラ・パシエガ洞窟のギャラリーCの突き当りにある絵に酷似した構図であるが、ラ・パシエガ洞窟のものの方が、技法的にはかなり複雑である。他に、非常に単純ではあるが表現力に満ちた雌ジカの頭部1つ、またヤギの絵もあるがこれは石灰の沈着の影響でかなり劣化している。その他、この部屋の入口部分に、黒の線でバイソンが1頭描かれている。これらの絵は、様式的に比較的整合性が見られ、様式IIIというよりは、様式IVの非常に古い時代のものに分類出来ると思われ、放射性炭素法による年代測定では15,000年前頃と特定されている。

第VII区から第IX区まで：
「穴」からでると、多くの崩落した岩塊や鍾乳石の石筍が見られる2つの部屋が続いている。この部分には壁画は非常に少ない。実際、入口から離れていくにつれ、絵は少なくなり、回廊の最終部分(第X区)で再び多くなってくる。第VII区から第IX区までは、非具象的な黒いマークが幾つかあり、その一部がウマの線刻画と重なっている。突き当たりには黒で描かれた判別不明な四足動物1頭描かれているだけである。

第X区、あるいは「馬の尾」：
曲がりくねった狭い回廊の最終部分約50mには、これまでとはうって変ってかなりの数の黒彩色や線刻の絵があり、また時々赤の顔料の残りがいくつか見える。黒の彩色画の中で際立っているのはカンタブリア風の四角い図形5つで、内部が3つに分割されているものや内部に整然とした梯子状の線があるもの、長辺に膨らみを持つものなどである。また、それらと共伴してやや小さ目の四角い図形が3つ描かれている。これは、前者のよく見られる形とはやや違い、一連の線が辺から外へはみ出している。この図形の放射性炭素14による年代は15,440±200年前と出ている。

また、少なくとも2つは描かれている「仮面」も驚くべきものである。これは天然の石灰岩の形状を利用してそこに目や鼻の穴、口を黒の彩色で表現したもので、カスティージョやラ・ガルマ洞窟の下段に見える幾つかの「仮面」と全く同じ考えに基づくものである。その他は、かなり古いスタイルのウマなど幾つかの動物の黒い彩色画や形をなさない線、あるいはバイソンの線刻画、ヤギ、そしてかなりの数の雌ジカなどが描かれている。こうして、まさにこの回廊の奥に、この洞窟全体で最も重要と思われる条線状の溝の線刻で描かれた雌ジカの頭部や数少ない雄ジカが描かれているのである。

*

現在、アルタミラ洞窟に描かれた題材を、僅かでも正確に数え上げるのは、大変難しいことである。理由は、集合体が大きくて極めて込み入っていること、また発表されていて入手可能な記録があまり詳細なものとはいえないことなどである。1978年にゴンサレス・エチェガライが行った計算では、これ自体もあくまで目安に過ぎないが、最低でもはっきりと分かる141の動物があるとしている。その内訳は、バイソン37、特に雌ジカが多いシカ35、ウマ33、アルプスカモシカを含むヤギ類24、原牛7、肉食動物らしきもの（ブルイユによれば、かなり疑わしいオオカミ1頭と、ネコ科の動物）2—3、マンモスらしきもの2、シュロ状に分岐した角を持つシカ類（これをヘラジカであるという研究者もいるが、この動物がカンタブリア地方にいたかどうかは推測の域を出ていない）1である。他に、陰画や陽画の手型や、少なくとも9つのヒト形の線刻、またいくつかの「仮面」も記録されている。図形に関しては優に100を超えており、際立っているのが赤い「楔型」と「櫛型(一種の格子型)」、また何本もの刻線が収束する「掘建て小屋型」あるいは「彗星型」などである。「多彩色画の間」にあるこれらの図形の他、中央部にあるいくつかの部屋の楕円や梯子状の赤い図形、また「馬の尾」の黒で描かれたでっぱりの付いた四角い図形もある。これらの図形が洞窟の限られた場所にしか描かれておらず、また、あるタイプの図形が異なったエリアに描かれていないということは注目すべきことで、もしかすると年代的にも重要であるかもしれない。また、図形が他の絵と比べて目立って多いという状況は、ソリュートレ文化期やマドレーヌ文化初期のカンタブリア地方中部ではよく見られたことで、ラ・パシエガやカスティージョ、ラス・チメネーアス、ラス・アグアスなどの洞窟でも認められる現象である。

これまで見てきたように、アルタミラ洞窟には、彫刻と浅浮き彫り以外の洞窟美術の技法が事実上すべて網羅されているといえる。その分布状況は洞窟全体に必ずしみ均一ではないが、「多彩色画の間」の場合は他の場所とは異なり、柔らかい粘土層の上に描く線刻以外は、全ての技法がそこで見られる。それは恐らく何千年にもわたってさまざまな時代にこの場所が体系的に何度も使われてきたことを物語るものである。この部屋以外では、赤の彩色画は希で、第III区の傍のギャラリーに描かれた図形と「馬の尾」に残った顔料の名残だけであり、多彩色の絵ともなると他では全く描かれていない。さまざまな様式を持つ黒線で描かれた動物の彩色画や、同じく動物の条線状の溝のあるものも含めた線刻画は、壁画のある全区域により均一に見られる。

これらの壁画の全ての年代やその順序に関しては、研究者の間で意見の分かれるところである。壁画の年代は、これまでに分かっている居住跡の年代を超えるものと言う学者もいれば、それと同じ頃という学者もあり、また、最近では、ほとんどの壁画がマドレーヌ文化初期の比較的短期間に描かれたものだとする学者も出てきている。第1のグループには、壁画はオーリニャック文化期から、多彩色のバイソンが描かれたマドレーヌ文化末期に当たるとするブルイユも含まれている。ルロア・グーランは、考古学包含層の年代と壁画の年代を基本的には同時期のものだと考え、その後マドレーヌ文化の初期から中期より後の時代にヒトが洞窟に入り、さまざまな場所に様式IVのかなり発展した様式で単発的にいくつかの線刻画を描いたものとしている。

もっと正確に言えば、ルロア・グーランは、黒の彩色画すべてが比較的同時期に描かれたものと提唱している。これは彼が提唱するいわゆる様式IIIの発展期に描かれたもので、特にマドレーヌ文化初期のものとしている。「多彩色画の間」の壁画は、マドレーヌ文化期の様式IIIからIVとし、多彩色の動物の絵や楔型図形も同年代のものとしているが、赤いウマや手型、点列、「掘っ建て小屋型」あるいは「彗星型」と呼ばれる図形などは同じ年代ではないようで除外されている。洞窟全体に見られる線刻画は、彩色画の間の空間を埋めるように描かれ、この洞窟が住居として使われたさまざまな時期に描かれたものであろう。「馬の尾」にある、バイソンとウマのグループならびにマンモスなどの絵はマドレーヌ文化発展期のものと思われる。

年代に関するこれらの仮説すべてを受け入れることは無理にしても、中にはかなり可能性の高い見方があると思われる。我々は、ブルイユが提唱するように、アルタミラ洞窟に前ソリュートレ文化期の壁画があっても全くおかしくないと考えている。むしろ、先ソリュートレ文化期に、アルタミラにヒトが住み、絵を描いた可能性を完全に否定することの方ができないであろう。その可能性を示すものとしては、メインパネルの突き当りにある赤い絵や第IV区の崩落した岩にある手型あるいは単純な線刻画などがあげられる。また、マドレーヌ文化初期より後に描かれた絵があることも明らかである。少なくとも大天井の小さなバイソンは、放射性炭素法では13,500から13,100年前のものと特定されており、これはこの地方におけるマドレーヌ文化中期に当たる。同様に、アルタミラ洞窟で知られている壁画の大部分は、現在までに玄関口で記録されている居住跡の年代に対応しており、ソリュートレ文化期（それより少し前かもしれないが赤い彩色画、あるいは黒の彩色画の一部、単純な線刻画など）、ならびに、多くの絵の描き方や様式から、そして現在でも行われている放射性炭素年代測定から判断して、マドレーヌ文化初期及び中期（黒い彩色画の一部や条線状の溝のある線刻画、多彩色画など）に、より多くのものが頻繁に描かれたと推定される。

従って現在ある資料を基にすると、様式IIIの年代より前の絵があったことを否定できない。この様式III、つまりソリュートレ文化期に対応するものには、少なくとも内部に描かれた楕円や梯子状の図形などが含まれ、黒彩色の絵や図形の一部は、恐らく様式IIIのやや少し進んだ時期、恐らくマドレーヌ文化期に入ってから描かれた可能性がある。線刻画の動物の一部、それも条線状の溝があるものは、類似の絵が描かれたモービルアートが14,500年前あたりのものと分かっており、さらに黒の彩色画の一部、また当然ながら多彩色画は、様式IVの初期に対応するものとなる。

主要文献：

Sanz de Sautuola, M. 1880. ***Breves apuntes sobre algunos objetos prehistóricos de la provincia de Santander.*** Imp. y Lit. de Telesforo Martínez. Santander. (Facsimil en Madariaga, B., 1976, pp. 67-96).

Cartailhac, E.; Breuil, H. 1906. ***La caverne d'Altamira à Santillane près Santander (Espagne).*** Imprimerie de Monaco. Monaco.

Alcalde del Río, H. 1906. "La Préhistoire aux environs de Santander. La station humaine d'Altamira". En Cartailhac, E.; Breuil, H. 1906.

Alcalde del Río, H.; Breuil, H.; Sierra, L. 1911. ***Les cavernes de la région Cantabrique.*** Imprimerie Vve. A. Chéne. Monaco.

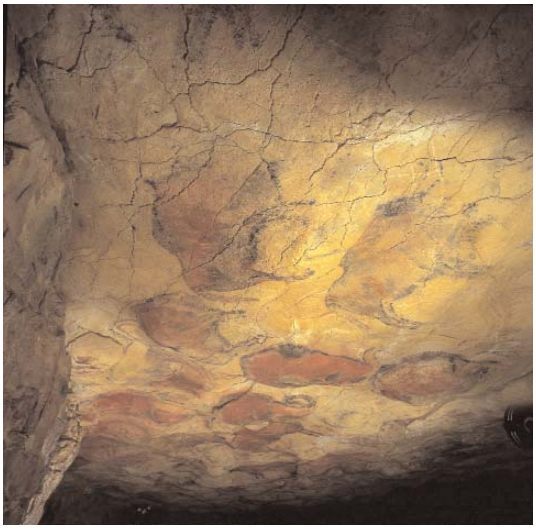
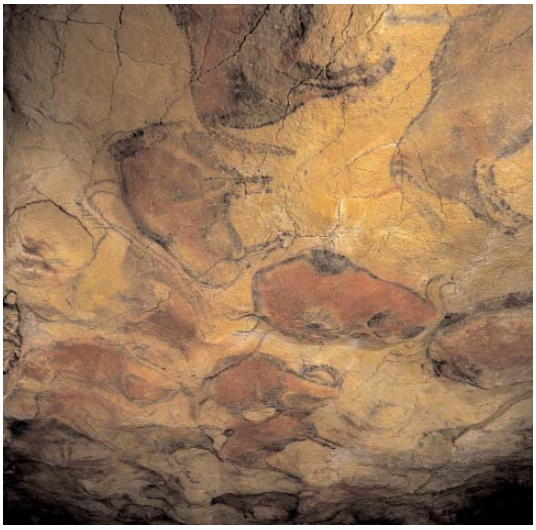
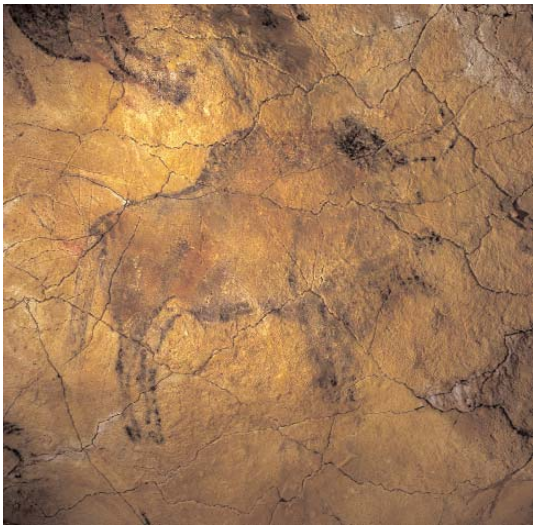
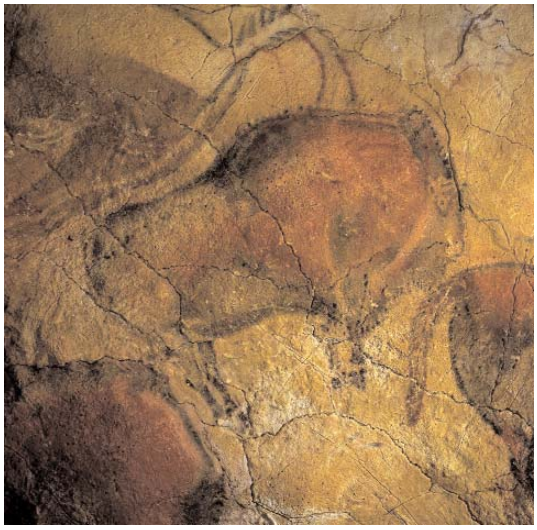
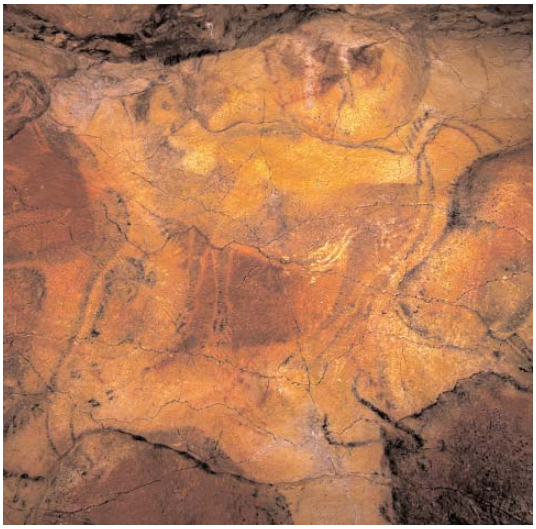
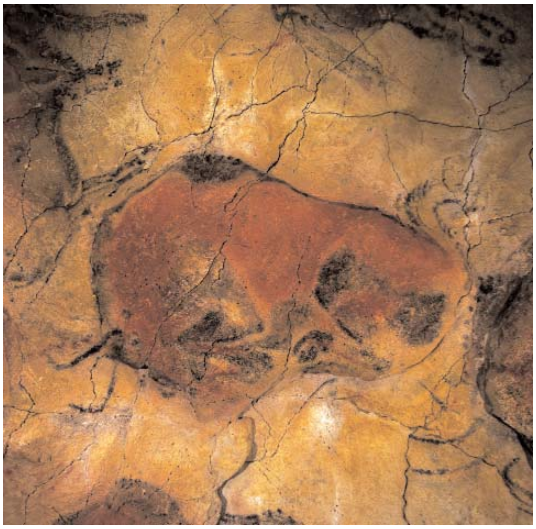
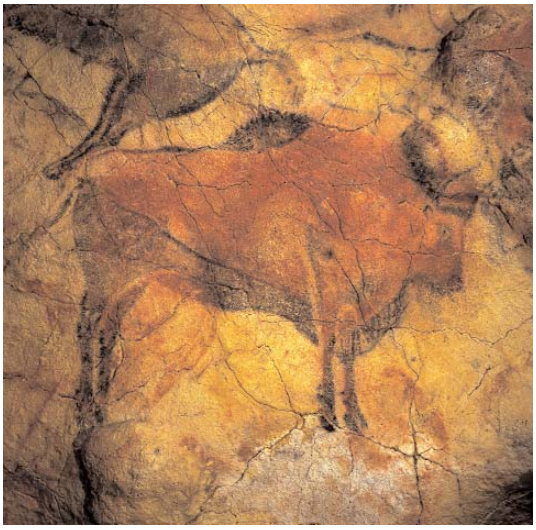
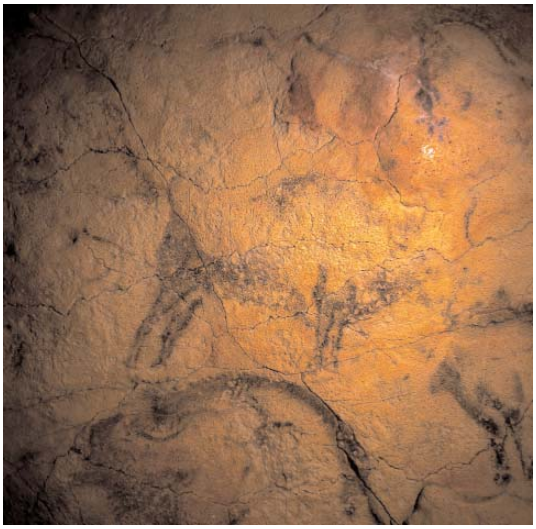
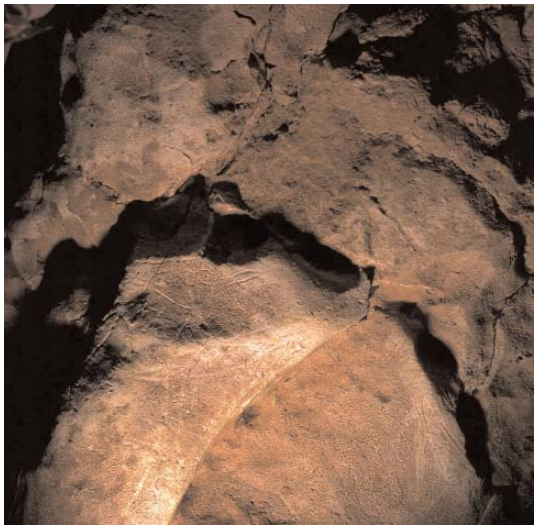
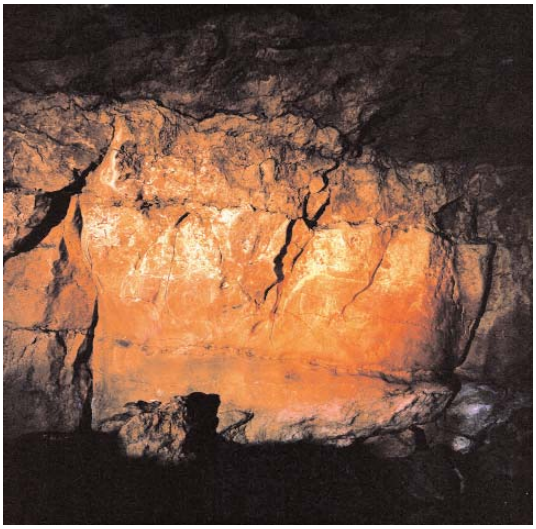
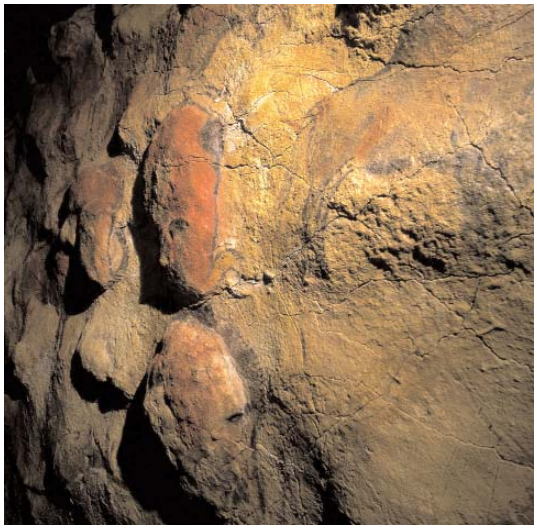
Breuil, H.; Obermaier, H. 1935. ***La Cueva de Altamira en***

Santillana del Mar. Tipografía de Archivos, Madrid. (Reimpresión Ed. El Viso, Madrid, 1984).

Leroi-Gourhan, A. 1965. ***Préhistoire de l'art occidental.*** Lucien Mazenod, Paris (2nd ed: 1971).

Freeman, L.G.; González Echegaray, J.; Bernaldo de Quirós, F.; Ogden, J. 1987. ***Altamira revisited, and other essays on early art.*** Institute for Prehistoric Investigations and CIMA, Chicago-Santander.

Valladas, H.; Cachier, H.; Maurice, P.; Bernaldo de Quirós, F.; Cabrera Valdés, V.; Uzquiano, P.; Arnold, M. 1992. Direct radiocarbon dates for prehistoric paintings at the Altamira, El Castillo and Niaux caves. ***Nature*** 357, pp. 68-70.

Moure, A.; González Sainz, C.; Bernaldo de Quirós, F.; Cabrera Valdés, V. 1996 "Dataciones absolutas de pigmentos en cuevas cantábricas: Altamira, El Castillo, Chimeneas y Las Monedas". A. Moure (ed.), ***"El Hombre fósil" 80 años después.*** pp. 295-324, Universidad de Cantabria, Santander.

Saura, P. A. et al. 1998. ***Altamira.*** Caja Cantabria y Lundwerg. Barcelona.